



終戦直後の築城飛行場 (昭和22年/1947)



格納庫前に並ぶ零式艦上戦闘機



空襲に備えた防火訓練 (椎田駅前/昭和17年/1942)



網敷天満宮前で防空訓練 (昭和17年/1942)



椎田高等実業女学校 (現築上西高校) 生徒による防空防火避難演習 (昭和14年/1939)

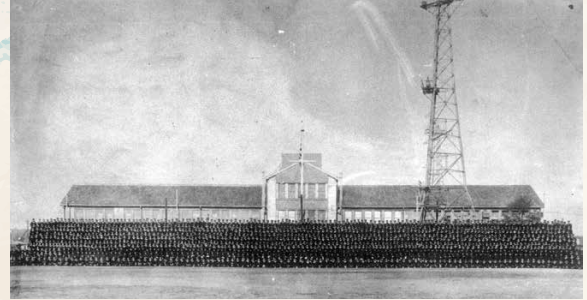
戦争の時代

築城飛行場と空襲

夏の企画展



貴様と俺とは同期の桜 同じ航空隊の庭に咲く



庁舎前集合写真 (昭和18年/1943)



築上町上別府で下宿していた兵士

2026年7月22日(水)~9月23日(祝・水)

時間 / 9:00~17:00 (月曜休館/入場無料)

*入館は16:30まで *9月21日(日)は開館

会場 / 船迫窯跡公園体験学習館

福岡県築上郡築上町大字船迫1342番地22

主催/築上町教育委員会 問合せ/船迫窯跡公園 TEL 0930-52-3771

この印刷物は築城飛行場関連再編関連特別事業で制作しました。

昭和20年3月以降、築城海軍航空隊飛行場周辺はアメリカ軍による空襲で大きな被害を受けた

I. 戦争の時代へ一日中戦争と太平洋戦争



出征兵士の見送り(築上町内)
(中央の出征兵士に少年が敬礼する)

昭和恐慌を契機に国内経済の行き詰りを打破するため、中国大陸に資源と市場拡大を求めた日本は、昭和6年(1931)、関東軍が自ら仕組んだ南満洲鉄道爆破事件を契機に、軍事行動を拡大し、半年ほどで中国東北部を占領し、満州国を建国した。(満州事変)

昭和12年(1937)、南に進出する関東軍が、満州国と中国との国境付近(北京郊外)で中国軍と衝突(盧溝橋事件)し、日中戦争が始まった。

昭和14年(1939)、第二次世界大戦が始まると、日本はヨーロッパの支配が手薄になった東南アジアに進出し、アメリカ、イギリスの中国への支援ルートを遮断しようとするが、屑鉄・石油全面輸出禁止など対日経済封鎖により戦線は膠着した。

日本国内でも昭和16年(1941)10月に乗用車の石油使用が全面禁止され、燃料不足の危機感から対アメリカ開戦が声高に叫ばれ始めた。

12月8日、日本海軍がハワイ・オアフ島の真珠湾を奇襲攻撃し、日本陸軍はマレー半島などアジア太平洋各地で一斉に軍事活動を開始し、アメリカ、イギリスに宣戦を布告し、太平洋戦争が始まった。

II. 築城海軍航空隊飛行場の建設

東九州は年間雨量が少なく、天候が安定し、地理的に中国大陸や沖縄に近い^{くれ}ため、呉海軍の訓練飛行場として宇佐とともに築城に飛行場建設が計画された。

築城海軍航空隊飛行場の建設は昭和14年(1939)に始まり、昭和16年に太平洋戦争が始まってからは建設が急がれ、朝鮮半島から徴用された人々を含む多くの労働者が24時間体制の突貫工事で、昭和17年に完成した。飛行場面積は145万㎡で、長さ1,800m、幅50mの滑走路が整備され、多くの民地が半強制的に国に買い上げられた。この時、建設予定地内にあった正八幡神社本殿は曳家技術で900m移動したという。

昭和19年(1944)以降はアメリカ軍による基地周辺の空襲に備え、行橋市稲童に中型戦闘機を格納する掩体(壕)が築かれ、築上町広末や赤幡の丘陵に弾薬倉庫壕や通信施設壕が造られた。また、100機以上の九三式陸上中間練習機(通称/赤トンボ)等の小型戦闘機は金富神社(築上町湊)の社叢ほか、町内各地に分散格納された。



京都郡青年団による基地建設風景
(航空自衛隊築城基地所蔵)



正八幡神社移転先の造成工事
『八田庄鎮座郷社正八幡神社移転改築記念写真帳』(昭和18年/金富神社所蔵)



弾薬倉庫壕(築上町広末)



金富神社社叢内隠匿の九三式陸上中間練習機(航空自衛隊築城基地所蔵)

III. 築城海軍航空隊飛行場と神風特攻隊

築城海軍航空隊飛行場は当初、操縦士育成飛行場で、航空母艦を基幹とする艦隊が、零式艦上戦闘機(ゼロ戦)の離発着訓練などを行った。昭和19年(1944)3月以降は、九三式陸上中間練習機(赤トンボ)をはじめとする陸上機訓練を行った。

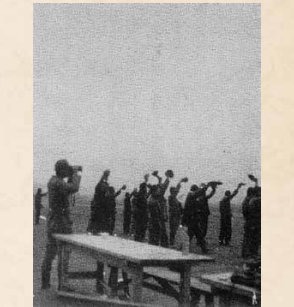
日本の戦況悪化により、昭和17年夏以降は実戦部隊も配属され、最大3,000人の海軍兵士が滞在した。そのため兵舎が不足し、多くの兵士が飛行場周辺の民家で下宿生活した。

昭和20年3月18日、ここから神風特別攻撃隊^{かみかぜとくべつこう}撃隊^{げきたいきくすいぶたいきんがたい}菊水部隊銀河隊が離陸し、九州南東海上のアメリカ軍機動部隊の艦船に体当たり攻撃を行い、搭乗員15人が死亡した。同年8月7日にはゼロ戦52型に3号爆弾(250kg)を搭載し、アメリカ軍B29大編隊に体当たり攻撃する天雷特別攻撃隊「白虎隊」が離陸した。

兵士達は他基地への転勤や出撃前、自身の写真にメッセージを添え下宿先に残した。



築城飛行場とゼロ戦の着艦訓練場



銀河隊を見送る兵士たち



椎田で下宿した兵士が遺した写真(裏には名前やメッセージがある)

IV. 空襲と戦時のくらし、そして終戦へ

戦時のくらし

昭和19年(1944)6月、北九州の官営八幡製鉄所を狙った空襲があり、築上町内でも空襲に備えた防火訓練や、上陸したアメリカ軍兵士と戦う竹槍訓練が行われた。

また兵器製造のため、寺の釣鐘や仏具など金属製品が戦時供出され、赤幡や椎田浜宮の松林では航空機の代用燃料として松根油製造の原料、松脂が採取された。兵員不足を補うため、臨時召集令状(赤紙)により多くの民間人や学生が戦地へ送られた。食糧の配給は十分でなく、米は水量を増やし、芋・豆・雑穀を混ぜ、また芋蔓や南瓜の種、茶殻等食べられるものはすべて食糧とした。

築城海軍航空隊飛行場への空襲

昭和20年(1945)3月から8月まで7回空襲に遭った。特に8月7日の空襲では、重箱池周辺で作業中の民間人多数と37人の兵士が死亡した。上城井国民学校(築上町本庄)では機銃掃射で教師・児童4人が死亡し、数人が負傷した。翌8日、局地戦闘機「紫電改」がアメリカ軍小型戦闘機4機と戦闘の末、小原に墜落し、乗員が死亡した。



防火訓練(延塚記念館前/昭和17年)
(指揮者以外はすべて女性)



金属供出(築上町水原/昭和17年)



現在の重箱池(横井塚池/西八田)



太平洋戦争戦死者慰霊碑
(上城井小)